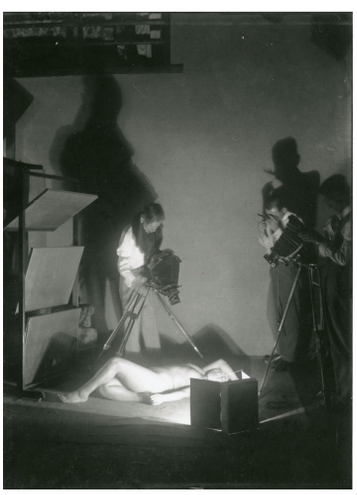
学芸員コラム｜vol.06
2022年12月1日発行

芦屋カメラクラブ

写真文化を浸透させた重要な地、芦屋

大槻晃実

1



2

3

1　芦屋カメラクラブ第2回展（朝日会堂、神戸）1930年11月
2　芦屋カメラクラブ撮影会（中山岩太アトリエにて）1930年代
3　芦屋カメラクラブ 六甲山撮影会 1930年

［参考］
「芦屋の美術を探る　芦屋カメラクラブ 1930−1942」展図録、芦屋市立美術博物館、1998年
東京都写真美術館編「『光画』と新興写真−モダニズムの日本」株式会社図書刊行会、2018年

1930 年代初頭から写真家たちの関心は、絵画を思わせる叙情的な「芸術写真」から、写真特有の技法を駆使して、写真でしか捉えられない新しいイメージを前面に押し出した「新興写真」へと大きく移り変わり始めていきます。「新興写真」とは、都市の情景を捉えるスナップショット、物の細部を浮かび上がらせるクローズアップ、光そのものを造形するフォトグラムやフォト・モンタージュといった技法を用いた写真表現です。その新興写真運動の一大勢力となったのが「芦屋カメラクラブ」（以下 ACC）でした。

1930 年、中山岩太、ハナヤ勘兵衛、紅谷吉之助、高麗清治らが芦屋で ACC を結成します。中山岩太は、東京美術学校臨時写真科を優秀な成績で卒業後、ニューヨークやパリで写真家として活躍し、当時の最先端のモダニズム文化を存分に吸収しました。1928 年に芦屋に移住した中山岩太は、市内で唯一の写真材料店を開いていたハナヤ勘兵衛と出会います。そこに集まった写真愛好家の紅谷吉之助や高麗清治らとともに、ACC を創立しました。突出した才能を持つ写真家の中山岩太、中心となって運営にあたったハナヤ勘兵衛、経済的にもサポートした紅谷吉之助らの出会いは幸運でした。また、この芦屋という地が、商人の街である大阪と港湾都市・神戸との中間に位置し、経済的な裏付けと海外から入る情報、文化などが集まる場所であったことも大きな要素だと考えられます。

当初、メンバーの撮影会は芦屋川沿いに位置する仏教会館で開催されていたようですが、後には中山岩太のアトリエにおいてしばしば行われました。彼らの制作方法は、スナップショット的な偶然性は排除し、照明や構図が意のままに操作できるスタジオ・ワークを重要視していました。

ACC 初の展覧会は、1930 年 4 月に朝日新聞神戸支局の朝日会堂において開かれました。同時期には、東京朝日新聞社で開催された第一回国際広告写真展で中山岩太が≪福助足袋≫で一等賞を受賞しています。
翌年の 4 月に東京で初の ACC 展を開催、その斬新な作風が全国的に注目されます。この展覧会は、「新しき美の創作と発見」と題し、『アサヒカメラ』6 月号に異例の大きさで詳しく紹介されました。本展は、新興写真時代の到来を告げるものとして日本写真界に影響を与えたモホイ=ナジらによる「独逸国際移動写真展覧会」が開催された翌月に、同じ会場で開催されており、写真評論家の森芳太郎が、世界の最先端をいくドイツの新興写真に対し、ACC 展の出品作を「写真画の新時代を予約するものだ」と同等あるいはそれ以上に評価しました。本展に際して刊行した写真集『芦屋カメラクラブ年鑑』の扉に記された中山岩太自身による宣言文は、このグループの理念と姿勢を簡潔明瞭に物語っています。

「總ての作家に　敬意を拂ふ　然し我々は
新しき美の創作　新しき美の發見　を目的とす」

1932 年 5 月、野島康三、中山岩太、木村伊兵衛の同人によって刊行された『光画』は、海外の状況を含めた写真に関する新しい動向を紹介しており、時代の水準を抜いた高度な内容を持った写真雑誌でした。中山岩太をはじめとするメンバーも全面的に参加、1933 年 12 月号までの全 18 号にそれぞれの力作を発表し、多くの作品が掲載されました。
1935 年、ACC 展はアシヤ写真サロン太展と名称を変え、1941 年の第 6 回展の最後を迎えるまで、会員以外にも広く全国から作品を公募するスタイルになりました。

このように、ACC は精力的に展覧会を開催し印刷物を刊行するなど、阪神間という地域性を越えた広範な活動を意欲的に展開しました。そして ACC の名は、阪神間のモダンなイメージとともに全国的に印象づけられ、芦屋は新興写真運動の拠点とみなされるようになります。中山岩太のアトリエでは、阪神芸術家クラブの会合がもたれ、ハナヤ勘兵衛のスタジオは関西学生写真連盟の発祥の地となるなど、広くサロン的な役割も果たし、写真文化を浸透させる重要な地でもあったのです。

（おおつきあきみ　芦屋市立美術博物館学芸員）